

八代目可楽『らくだ』とベトナム交通事情

実は古典落語のファンである。「大」ファンほどではなく、つかず離れず 30 年...というところか。寄席にもホール落語にも 20 年以上足を運んでいないが、昨今は落語ブームとか。『平成の名人』もたくさんいるらしい。結構なことだ。落語に興味を持ったのは、高校三年の 1979 年 9 月。六代目の三遊亭圓生が亡くなり、その追悼番組で『三十石』を TV で目にしたときに始まる。この噺は、江戸から伊勢参りに向かう二人旅が、京都から淀川を下る三十石舟に乗り合わせる前後を描いているが、圓生の写真話芸が見事で、まさに江戸の風景までもが、まざまざと眼前に浮かぶように感じるのだ。『話に引き込まれる』という表現があるが、落語関連小説の白眉¹、『円朝／小島政二郎著／河出文庫』に、三遊亭円朝が話術に開眼した時期の印象的な文がある。

話が終わった時、いつものようにとたんに拍手が起こらなかった。彼は思わず、「おや？」

と思った。見ると、彼の話引き入れられて、客という客が、言い合わせたようにみんな前ごみに体を乗り出して聞き入っていた。彼の話が終わったので、ホッと満足の溜息をつきながら、体をもとの自然の姿に戻そうとしていた。その間、客は拍手をすることを忘れていたのだ。それほど魅了されていたのだ。体がもとの楽な姿勢に戻った時、彼らは一斉に拍手を送って来た。

前置きが長くなった。八代目の三笑亭可楽の話である。数年前、隔週で『昭和の名人』CD シリーズが販売されていた。その中に、八代目三笑亭可楽の『らくだ』が収録されている。可楽は渋味のある芸風で、長い複雑な噺でもさらりとこなす「省略」の名人であった。色川武大（阿佐田哲也）など、いわゆる「通」のファンが多かったという。この『らくだ』も割と長尺噺²なのだが、25 分程度にまとめている。昭和 31 年の収録とのことだが、寄席における音源か、やたらと室外の音が耳に入る。今であれば、浅草演芸場か上野の鈴本あたりだろうか。わけても、車やバイクのクラクションが喧（かまびす）しい。そう、昨今の『ベトナム交通事情』と瓜二つである。ベトナムの都市部は、朝から晩まで終日、バイクのクラクション騒音が絶えることがない³。

経済白書に、『もはや戦後ではない』と記述されたこの年、わが国は高度経済成長の入り口にさしかかっていた。その成長を物語る市民の激しい activity が、この『らくだ』背景音として記録されていると思う。もちろん、需要に追いつかない道路整備の遅れも一因だろうが、ベトナムと同様、未来へ向かう、明るく若々しい日本人の様子を、可楽の噺に興じる観客の笑い声も交えて今に伝えてくれる。ちょっと不思議な落語体験である。

今日は羽田空港国際ターミナル開業日。そんな日にアナクロな話ではあるが、江戸・明治から昭和に至るこの大都市のうつろいに思いを馳せ、これから始まる未体験の超高齢化社会を如何に迎えるか。大きく、長いうねりの中で悩みつつ、かつ新たな挑戦に心奮う日々を送ろう。

¹ 落語関連書籍の No.1 は、やはり『びんぼう自慢／古今亭志ん生／ちくま文庫』かと思う。是非。

² この噺は、「らくだ」と呼ばれた乱暴者がフグにあたって死亡。彼の遺体発見から始まり、罰当たりなことに、その遺体を使った踊りで、隣近所の人々から見舞金を脅し取る...という無茶苦茶な内容だ。

³ ベトナム交通を再現する場合、クラクションによるバイク間の行動影響を織り込むことが不可欠であろうが、今のマイクロスミュレーションでは無理だろう（というジョーク）。